

桜蔭俳話会 六月句会 (第三二六回)

平成二十五年六月二十三日(日)

会場・桜蔭会館

選評&添削ノート

鑑賞

父の歩に合はせしをさな柿若葉 清子

幼子の歩幅は父の歩幅よりも狭いので、一緒に進もうとすれば当然幼子の歩くピッチは父のピッチよりも早くなる。そのようにして歩く父子の情景は微笑ましいものであり、この句の良さを否定する者はいない。生命感を表す「柿若葉」と「をさな」との配合も効いている。

しかし、「幼子が父の歩に合わせて歩く」という句立ての句は既に度々詠まれており、あまり新鮮味がない。このような評価から脱却するには、同行者の特定化表現としての「をさな」を、実景からは離れるかもしれないが、思い切って消して見ることである。例えば次のようになる。

父の歩に合はせてをりぬ柿若葉

このようにすると、歩を合はせている同行者の推測範囲が拡大される。常套的に推測する詠み手は、俳句的効果が端的に表れる幼児であると捉えるであろうが(それはそれで良いが)、主語を句中で特定していなければ主体は作者であるという俳句の基本ルールに従った者は、同行者は大人であると捉えるであろう。

そうすると、足の動きが小さく遅くなった父親の介護のために同行している作者たる息子または娘が、父を氣遣って歩くピッチをゆっくり目に調整している様子の句になる。最初の鑑賞とは真反対となるが、評者にはこの方が新鮮である。

客観写生は勿論句作りの根幹にある技法であるが、吟行はあくまでも句材をすくい上げる入口に過ぎず、そこで得られたイメージを膨らますこと、あるいは別のものに飛躍転換させることも、俳句作りの楽しさかもしれない。

自句自解

ストレスのなきがストレスところてん 守

評者は、卒業して程なく高度成長期に遭遇し、これを無我夢中に突っ走った。最後はバブル景気の後始末に追われたが、総じて良き方の人生を送れた世代かと思う。その反面、ストレスは激しく、病に倒れた仲間を少なからず見てきた。セミ・リタイアの今の身には、ここ数年飼いや慣らしている慢性疾患の病魔一匹のことを除けば、現役中のような仕事上のストレスはない。

このような心持ちで心太がぐいと突き出される場面を見ている時、この句がふと浮かんだ。ところてんは、一連の流れに抵抗することなく小鉢に突き出され、さしたる自己主張することなくそこに存在している。ところてんにはストレスがない、という作者の勝手な思い込みに依る句である。

鑑賞

命名にルビを入れをり若葉雨

ツル子

近頃は出生届に記す名前の表記の自由化が進み、漢字さえ規定の枠内に入っていれば、その読み方は自由に任されているようである。そのため、ルビを振らなければ他の人には判読できないものも現れている。命名者としては(大方はイメージの豊富な若き親であろうが)、子供に託した夢や希望を最も良く具現化したものとして自負しているのかも知れないが、そのような名前の付けられた子供にとっては、進学や就職といった人生の新しい転機を迎える度に、自分の名前を新しい仲間周知徹底させる努力を要求されることになる。このような努力を強いられる反面、非常に個性的な名前のゆえに、たちまちに人気者になるかも知れない。個性的な命名の功罪はともかくとして、命名書にルビが振られているのを見て、句材となると判断した作者の炯眼には脱帽する。

俳句の表記としては「を」を消して、例えば、次のようにすることもできる。

命名にルビの振られし若葉雨

鑑賞

初蛩つなぐ幼の手の柔し

友子

幼い子の手を引いて蛩狩に出掛けたときの句である。足元が暗い中を水辺に向かうとき、躓きそうになった子供の手を強く握り締めた。そのとき、幼子の手の平の柔らかさを強く実感する。この子を護ってやらねば、この子の成長を見届けてやりたいという気持である。

俳句表現としては、幼いを消して、大人同士の恋の句に仕上げることもできるが、作者は、柔らかな手の平から伝わる温みを媒介として、年長者の年少者に対する慈しみの情愛を詠みたいのである。常套的であると言われても、「幼い」は決して外せないであろう。

でも、初蛩の「初」と「幼い」のイメージは重なるので、「初」は消した方が良い。例えば、次のような句になる。

蛩狩つなぐ幼なの手の柔し

鑑賞

山の湖緑に映えり山法師

幸

湖面に周囲の山の緑が映り込んでおり、その中に山法師の花影も散見されるということである。絵画的な俳句として実在感がある。

ただし、山法師を詠むことが主眼の句であるから、わざわざ湖が「山の湖」であると念押しする必要はない、と思う。また、原句では三段切のような感じがする。そのため、例えば、次のようにすることもできる。

湖の緑に映えり山法師

鑑賞

草刈るや母の背中に汗のしみ

邦子

母親が家事の合間に庭の草取りをしているのか、あるいは農家の働き手として田畑の草取りに勤しんでいるのか分からないが、母の着衣の背中には汗が滲み出ているという。着眼の良い句である。

しかし、「草刈る」と「汗」はいずれも夏の季語である。一句中に季語は一つという俳句の原則に従えば、どちらか一方を消す必要がある。「汗のしみ」にこの句の主眼があるとすれば、「草刈る」消すか、別の言葉

に置き換える必要がある。例えば、次のようにすることができる。

狭庭なる母の背中の汗のしみ

あるいは

畑山の母の背中の汗のしみ

鑑賞

風涼し動く歩道の曲り角

真三

大規模商業施設や空港、地下鉄通路などには、利用者の便宜のために動く歩道を設置している。

この句を最初に読んだとき、疑問に感じたのは「曲り角」である。これまでの動く歩道は、出発点から到達点まで直線の経路に設置することを前提に設計され、その直線経路に沿って一本または複数本が同一方向に設置されているだけである。構造上、一本の動く歩道の途中に曲り角を設けることは出来ないからである。

ここまでは在来の固定観念に囚われた短絡的な解釈である。実際には商業施設等の更なる大型化や拡張に伴い、移動経路は直線性を確保できず、曲りくねったものとなっている。

作者は、移動経路の変化に伴って、移動経路が複数の動く歩道によって構成され、かつ、それら複数の動く歩道が、互いの配置方向を違えて設置されている、という客観的事実を踏まえて、この俳句を作ったのである。

作者は、「曲り角」と敢えて言うことによって、読者の意表をつき、複数の動く歩道が乗継ぎ点において方向転換がされているという事実を指摘しているのである。

客観写生に徹する作者ならではの快心の一句である。

乗継ぎ点の風が涼しいとは、まさに爽快な捉え方である。

鑑賞

迎賓館の樹木の太き松落葉

幸

普段はなかなか入れない迎賓館を訪れたときの句である。その庭には歴史を物語るように大木が聳えており、松落葉が見られたとのことである。さぞかし壮大な広々とした庭園であったことであろう。

でも、松落葉という木の事を詠むのに、中七で樹木が太いという同じ木に関する情報を述べたのでは、どちらを詠みたいのか句の焦点が曖昧になる。ここは、太い樹木の存在は消して、庭園の上に広い空が広がっている程度の補足情報をさりげなく埋め込めれば良いと思う。例えば、次のようにすることもできる。

迎賓館の空の広々松落葉

鑑賞

夕暮れの水に怯まぬ蜘蛛の糸

明美

蜘蛛が水を嫌うかどうか、生物学上の真実は、寡聞にして知らない。

しかし、作者によって蜘蛛は水に怯まないと断定されると、そうなのだろうなと思ってしまう。蜘蛛は、水面付近を飛び回る虫をも捕捉すべく、今日も水面すれすれまで網を張っている。

不思議な感覚の一句である。

鑑賞

三保の松原を含めた富士山の世界文化遺産登録に対する慶祝句である。

「松籟」という松に吹き渡る風を上五に持つてくることによつて、三保の松原を詠みこんだのは、巧いの一言葉である。

「雨の上がりし」の中七には、世界自然遺産登録を逃した末に、世界文化遺産登録にやっと漕ぎ付けたことへの思いが込められている。

鑑賞

水無月に世界遺産だ富士の山

直子

前句と同様に世界文化遺産登録の慶祝句である。

俳句は、現代かな遣いで作っても（口語俳句）、あるいは歴史的かな遣いで作っても（文語俳句）良いが、おおかたの俳句先達の考えでは、文語俳句の方が韻文性が出易いとしている。かな遣いは作者の選択に任せられているが、同一句中での両かな遣いの混用は、禁じられている。

この句を文語俳句に修正すれば、次のようになるであろう。

水無月の世界遺産よ富士の山

（文責 代表 増田守）